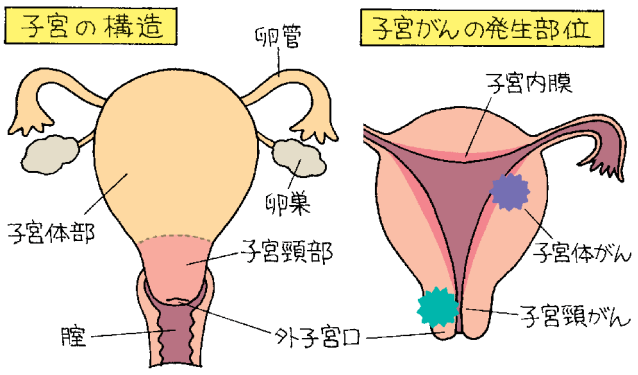
「子宮がん」のことを知ろう！

●子宮がんとは

若い世代もかかる子宮がん

子宮がんによって、1年間で約7,200人※の女性が亡くなっています。子宮頸がんと子宮体がんがあり、子宮頸がんは若い世代の女性でも罹患率が高いがんです。

※出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」（厚生労働省人口動態統計）



子宮頸がん

子宮頸部の入口（外子宮口）に発生することが多く、多くは進行するまで自覚症状がありません。若い世代から発症するので、20代から定期的に検診を受診し早期発見することが重要です。

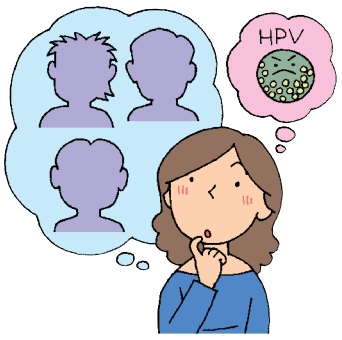
子宮体がん

子宮内膜がんともいわれ、子宮体部の内側の子宮内膜に多く発生します。閉経前の発症は少ないとされています。日本人には少ないがんでしたが、近年は増加傾向にあります。

●子宮がんの主なリスク

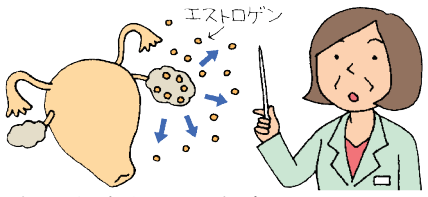
ウイルスが影響する子宮頸がん

子宮頸がんの要因として、ヒトパピローマウイルス（HPV）の持続的感染が確認されています。HPVは多くの女性が性交渉によって感染するため、性行動の活発な若い世代が感染しやすい傾向があります。通常は感染しても免疫機能により排除されますが、排除されずに一部の人の細胞ががん化することがあります。



エストロゲンが影響する子宮体がん

子宮体がんの多くは、女性ホルモンのひとつであるエストロゲンがリスク要因となって発生すると考えられています。更年期障害に対するホルモン補充療法なども体内のエストロゲンの濃度を高めるため、体がんのリスクが高くなるとされています。



そのほかの子宮がんのリスク

喫煙は子宮頸がんのリスクになります。子宮体がんについては、生活習慣による肥満、高血圧、糖尿病などもリスク要因としてあげられています。

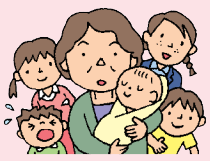
●あなたの子宮がん危険度チェック

☑の数が多いほど子宮がんの危険度は高まります。

●頸がん

- ☐ 20歳以上の女性である。

- ☐ 妊娠・出産の回数が多い。

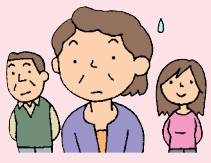


- ☐ 喫煙の習慣がある。

- ☐ 子宮頸がんワクチンを受けていない。

●体がん

- ☐ 40歳以上の女性である。



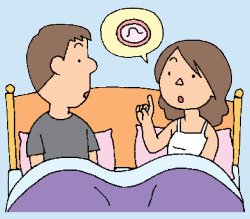
- ☐ 閉経年齢が遅い。

- ☐ ホルモン補充療法の経験がある。

- ☐ 肥満・運動不足である。

心がけ① ヒトパピローマウイルスの感染を防ぐ

ヒトパピローマウイルス（HPV）の感染予防は、子宮頸がんの予防に有効であることが確認されています。HPVは性交渉によって感染するため、性交時にはコンドームを正しく使用するなど、ほかの性感染症予防と同じように自ら対策をとりましょう。また、HPV感染前にHPVワクチンを接種することで、感染の可能性を減らすことができます。



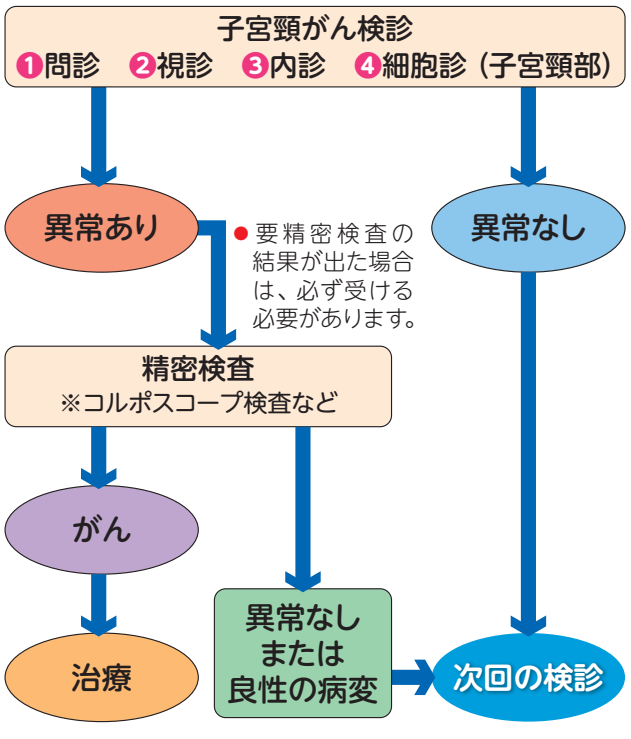
心がけ② 若いうちから積極的に検診を受ける

子宮頸がんは、20代や30代の若い世代の女性もかかるがんです。しかし「がんは中高年の病気」という思い込みなどがあり、何よりも若い世代の検診の受診率の低さが、患者の増加につながっています。検診に対する気恥ずかしさも、若い世代の受診を遠ざけている要因のひとつと考えられています。若いうちから自覚をもって、積極的に検診を受ける習慣をつけましょう。

●子宮がん検診を受けよう！

20歳をすぎたら、定期的に検診を受けましょう。

子宮頸がん検診の流れ



❶問診

不正出血の有無など現在の症状、月経や妊娠・分娩などに関すること、本人や家族の病歴、過去の検診の受診状況などが聞かれます。疑問や不安がある場合は、事前にメモしておき、ここで伝えましょう。

自覚症状があったら

検診日を待たずに、病院（婦人科）を受診しましょう。ただし、子宮頸がんは、初期段階での自覚症状はほとんどありません。

- 月経と無関係な出血（不正出血）がある。
- 月経異常（不規則月経など）がある。
- 下腹部の痛みや、排尿痛がある。
- 異常なおりものが増える。 など

❷視診

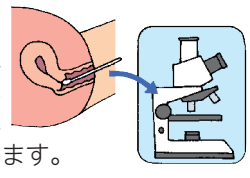
腟鏡（クスコ）という器具を腟内に挿入して、子宮頸部の状況を観察します。

❸内診

双合診ともいい、医師が片方の指を腟内に入れ、もう片方の手でおなかを押さえて、はさみながら子宮の状態を触診します。

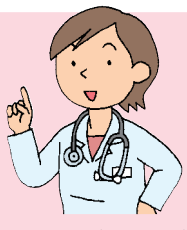
❹細胞診（子宮頸部）

子宮頸部の細胞を綿棒やブラシ、ヘラなどでこすって採取して、顕微鏡で観察する簡単な検査です。がん細胞が見つからなくても、細胞診を行うことで、がんになる前の段階から診断することができます。



●HPV検査

子宮頸がんの原因ウイルスであるHPV（ヒトパピローマウイルス）の感染の有無を調べる検査です。「HPV陽性＝がん」というわけではありません。今後ウイルスが排除されずに感染が長引いた場合、がん化するリスクがあることを把握して、子宮頸がん検診（細胞診）を定期的に受けることで、子宮頸がんを予防できます。



●子宮体がんは症状に要注意！

子宮体がんは初期段階で出血することが多く、不正性器出血による発見が多いがんです。症状があったら、至急医療機関で受診しましょう。